

創造社と少年中国学会・新人会

——田漢の文学及び文学観を中心に——

小 谷 一 郎

一九二二年一月に発行された新人会機関誌《同胞》の會員通信欄「火鉢を囲んで」には「少年と新人との問答」という詩が掲載されている。

「新人よ！新人よ！君幾つ？」

「僕は今年丸二つ」

「君の父さんが何処にゐる？」

「父さんなんか僕にはない」

「だってない筈がないぢやないの」

「オ！New Spirit が僕の母ちゃんだよ」

という一節に始まり、

「新人よ！新人よ！待ってお呉れ！

あんなに急いで何処へ行く？」

「僕はこれから人民の中へ

人民が僕等を待ち兼ねて」

「おや！おや！同んなじ路だから

君と一緒に往かぢやないか？」

という一節に終る五節からの詩で、「新人」に対する「少年」からの、共感と連帯をうたつた詩である。運動の生成熟期にありがちな観念性と初々しさをあわせ持っている詩といつていいだろう。

「新人」が新人会を指していることはいうまでもない。

「少年」とは少年中国学会のことである。少年中国学会は後述のように「五四文学革命」期に北京で結成された、統一戦線形式の文化思想団体。一読して解るように、新人会結成二週年を祝つて書かれたこの詩は、それぞれ、大正デモクラシー、「五・四文学革命」という同時代を生きていた日中兩國の知識人組織、新人会と少年中国学会との間にある交流があつたことを示している。

この詩の作者は田漢である。田漢はこの時東京在住の少年中国会会員の一人であり、半年後に結成される創造社の主要なメンバーの一人であつた。

周知のように、創造社は一九二二年五月、《創造》季刊

を創刊し「内心の要求に基づいて文芸の活動に従事する」^(注1)ことを柱に、「個性の解放」、「自我の確立」の文学を唱え中国での「新文学」の建設を意図して活動を開始した文学団体である。先の詩はこの創造社と少年中国学会新人会との関係をも示しているわけである。交流のあった所謂「五・四」期は創造社の活動の歴史からみればいわば「黎明期」といつてさしつかえない。そうした時期に少年中国学会、新人会と何らかの関りがあったということは創造社の文学の質や性格に関する問題であり、その後の創造社の文学活動を見ていく上でも重要な意味をもっていると考えられる。

創造社の活動は前述した所謂第一期の文学観から郭沫若の「革命文学」論に代表される第二期をへて第三期の、福本イズムの影響もあつたと考えられる「革命文学」論へと移行した点に特徴がある。拙稿「創造社^(注2)年表」にも取めたように同人の大半が日本留学生である創造社は、その「左傾化」も日本の近代文学、とりわけプロレタリア文学の流れとの関わりから検討される必要がある。そうした時、後期新人会が福本イズムのメッカといわれていたことは一注目すべき事柄のように思われる。

また、中国社会主義青年団の機関誌《中国青年》は少年

中国学会の思想的分化を背景にマルクス主義を受容した同会会員を中心にして刊行されたと考えられる。そうしてみた時、少年中国学会と密接な人的な繋りがあった創造社の「左傾化」は少年中国学会の思想的分化、《中国青年》との関わりからも捉えてみる必要があると考えられる。

田漢は一九二〇年一月少年中国学会会員宗白華の紹介で郭沫若を知り、創造社結成の話に加わる。だが、一九二二年の秋、成仿吾との争いがもとで創造社の中心から離れる。田漢が創造社の主翼の一人として活躍したのは僅か二年余の間である。

田漢個人の営みは創造社という社団全体に通じるものではないかも知れない。しかしながら、その社団に属する個々人の営みは、ときにその社団のより本質に近いものを映しだしてくれるように思われる。

小論は、新人会、少年中国学会との関わりを軸にすえながら、その関わりのいわば接点にいた田漢の営みを通じて、「黎明期」の創造社の文学の質や性格の一端を明らかにしようとするものである。

(1)

先ず立論の前提となる少年中国学会と新人会との交流を概観しておくことにしたい。

周知のように、新人会は一九一八年十二月、吉野作造の助力の下に東京帝大法科の学生、赤松克麿、宮崎竜介、石渡春雄等によって結成された。^(註三) 同会綱領は「一、吾徒ハ世界ノ文化的大勢タル人類解放ノ新氣運ニ協調シ之カ促進ニ努ム。一、吾徒ハ現代日本ノ正当ナル改造運動ニ従フ^(註四)」である。

また、少年中国学会は新人会と同じ一八一八年の六月三十日に北京の嶽雲別墅で準備会が開かれ、一年の準備期間を経て翌一九一九年の七月一日に正式に発足した。発起人は王光祈、陳愚生、周太玄、曾琦、雷眉生、張夢九、李大釗の七名、同会の宗旨は「科学的精神に基づき、社会的活動を行い、^(註五)少年中国^(註六)を創造する」であった。

この二つの会は交流があったという事実だけからも容易に想像されるようにある共通した雰囲気をもっている。「少年中国」「Young China」「新人」という言葉がそれを端的に現わしている。いうならば、それは変革の主体を「純真なる良心と聡明なる理智と熱烈なる気魄とを有する青年自身^(註六)」に求めた、青年の気概と使命感である。それはまた、自覚せる青年、すなわち「New Spirit」の青年こそがその思想的な面でも「世界の潮流」と常に一つの方向へむかって進むもの^(註七)だという自負に基づくものであつ

た。少年中国学会についていえば彼らが創造しようとする少年中国とは、一に「二十世紀の思潮に適合する少年中国^(註八)」なのである。

おそらくはこうした同時代的精神を共有していたことがこの背景としてあるだろう。少年中国学会との交流は後述するように、一九二〇年五月の「北京大学遊日学生団」の来日をもって一つの頂点をむかえる。これに到る経過については夙に松尾尊兌氏が「民本主義者と五・四運動^(註九)」の中で紹介されている。また私もその一部をすでに書いた^(註一〇)こともあり、ここでは若干の事実を補いながら簡潔に叙述したい。

松尾氏が指摘されるように、当時の「五・四」運動非難の論調が大勢を占めた中でそれに対し卓越した評価を下した吉野作造は、一九一九年六月、黎明会会員有志の決議を受けて、「北京から教授一名、学生兩三名^(註一)」を東京に招くべく北京の李大釗に書簡を送った。当時、北京大学の図書館主任で少年中国学会発起人でもあった李大釗は、吉野作造の北洋法政学堂教習時代の教え子である。

李大釗からの返事には学生来日の話はなく、「日本国民の真意及びデモクラシーの精神を弊国人民の前に披示」すべくむしろ吉野の中国訪問を促すものであった。このため吉

野は直に学生来日の件を李大釗に談合してもらうべく、折しも北京に向っていた新人会会員岡上守道にその旨依頼した。^(註二〇)しかし、李大釗に会った岡上は、「新思潮を了解せる青年教授」の訪日は可能だが、学生訪日の件は「刻下の外交問題」が何らかの結着がつくまで無理であろうとの李大釗の言を伝えてきた。

ところで、岡上が中国に向ったのと前後して、上海の全国学生聯合会は黎明会に宛て次のような書簡を発表して^(註二一)いた。彼らはその中で、排日の対象はあくまで「侵略主義的日本」にあり「親善的平和的平民主義的日本」にはないことをのべ、さらにヨーロッパ列強が「経済政策をもって東方に殺到」している今日、日中が共同してこれと斗う必要があることを強調している。この書簡は反帝・反軍閥の視点から日中人民の連帯を説いている点で画期的な書簡である。

しかしながら、この書簡が発表された後も学生来日の話は容易に実現はしなかった。この後、宮崎竜介など何人の新人会会員が中国と行き来し、^(註二四)少年中国学会側から新入会に初めて言及した易君左の文章なども発表されるが、^(註二五)その話を実現したのはそれから半年以上もたってのことである。

「北京大学遊日学生団」が組織され、北京を出発したのは一九二〇年の四月二七日であった。^(註二六)同団は団長の北京大学教授高一涵ほか五名の学生によって構成され、学生の中には康白情以下四名の少年中国学会会員がいた。実質的に少年中国学会を代表する団であったといつてよいであろう。

新人会は、五月一日、上京したこの団のために帝大構内山上海議所で歓迎の晩餐会を催した。この日、吉野作造が出席したことはいうまでもない。森戸辰造、櫛田民蔵も出席し、まさしく少年中国学会と新人会との交流の中で一つの頂点であった。そして、新人会はこの日のことを「又諸君は北京大学を代表すると共に、支那の学生運動の一枢軸たる少年中国学会の幹部である。諸君の来朝に依つて若き支那の先駆的一グループである少年中国学会と若き日本の先駆的一グループである新人会との堅き握手が成つた訳である。」^(註二七)と報じたのである。

だが、それは同時に会として交流し得た最後でもあったのである。松尾氏が指摘されるように、彼らの来日に応えるべく進められていた訪中の計画は政府の弾圧によって日の目を見ず、また新人会機関誌にはその年の七月以降中国に関する問題が論じられることはついになかったのであ

る。

しかしながら、それは会としての交流の最後ではあつても、冒頭の田漢の詩にみられるようにその関係が全く断れたことを意味しない。それは、この交流の中で生まれた個人的な繋りを基に、少年中国学会と密接な関係があつた創造社同人、田漢、李初梨などむしろ個人レベルで受け継がれていくのである。あえていえば、この個人的なレベルでの繋りはそこにいた個々人はいうまでもなく、彼らを通じて創造社に、さらには少年中国学会にもある影響を与えていたのではないかと思われる。

以下私はこの交流の中の接点にいたと考えられる田漢の営みを通じて創造社・少年中国学会・新人会のかかわり、さらには創造社の文学の質・性格の一端を考えてみようと思う。

(2)

田漢、一八九八年湖南省長沙の生れである。幼小の頃から演劇を好み、八才の時に父親を失つたという田漢は、おそらく多感な少年であつたに違いない。父親の死後、田漢の一家は母方の叔父で、後に田漢の妻になる易漱楛の父易梅園の援助を受ける。^(註一八)

辛亥の年、田漢、僅かに十二才である。彼は漢陽の役で

死んだ劉玉堂の追悼会で主人を失つた軍馬を見て涙する。

田漢が家人に内緒で北伐学生軍に参加したのはその後まもなくのことであつた。田漢が学生軍にいたのは三ヵ月余りの期間でしかない。だが、辛亥革命で火のついた愛国的感情は田漢の中から消えてはいない。

田漢は「南北和議」後学生軍を離れて学費のいらない長沙第一師範学校に入学する。彼の劇作はこのころから始まる。田漢が《長沙日報》に投稿した最初の戯曲は、京劇「三娘教子」を改編した「新教子」であつた。それは、「漢陽の役で戦死した軍人の妻がその子に父親の志を継いで国家、民族のために尽力するよう教え諭す」という話である。^(註一九)

田漢が最初に日本に留学してきたのは一九一六年である。だが、彼は二年後の「日中軍事協約」反対運動の中で帰国する。そして、この帰国運動が少年中国学会結成の背景になっているのは「創造社年表」に記した通りである。^(註二〇)

おそらくはこうした素朴な愛国的感情と、早くから少年中国学会に加入していた左舜生、易君左等との個人的な繋りから田漢もまた少年中国学会に加入したのであろう。田漢が少年中国学会に加入したのは「五・四」運動が起きてもない一九一九年五月ごろのことである。田漢はこの時、郷里長沙からほとんど駆落ち同様の恰好で愛する易漱

諭と共に上京した。田漢が加入したのは「生涯の中で最も
幸せな旅であった」と述懐するこの二度目の日本行の途中
である。

創造社のメンバーの中で少年中国学会に加入したのは一
人田漢だけではない。李初梨、鄭伯奇も少年中国学会会員
であった。また、正式の会員ではなかったが王独清、郭沫
若も少年中国学会に近いところにいたと思われる。郭沫若
を例にとれば、彼は王光祈、曾琦、周太玄等と四川の成都
高等学堂分設中学時代「同学」であり、『少年世界』日本
号にも寄稿している。このことから、少年中国学会と創造
社とは同時代的性格をもって以上の密接な関係があつ
たと考えられる。

さて、少年中国学会に加入した時点での、田漢の考え
は、少年中国学会東京会員「談話会」の席上での発言から
知ることができる。この会合は、東京府下戸塚町大字諏訪
一七三松山荘で六月二九日に開かれた。学会の成立大会を
二日後に控え、この会合は東京会員による初の連絡会的な
性格をもっている。田漢はこの時、「少年中国学会の目標」
について次のような発言をしている。

学会宗旨(改訂前)の主眼は「少年精神を發揮する」、「末
世の風氣を転移する」の二つである。前者は「個人的」、後

者は「社会的」な部類に属し、したがって学会発展の目標
も「個性の完成を図る」、「社会の改造を図る」の二つがあ
る。このためには「私たち同人は第一に理想生活と現在の実
生活とを調和して、あの『現実的理想と理想的現実』の第
三世界を建設しなければならぬ」。

「第三世界」という言葉自体は、イプセンの「皇帝とガリ
ラヤ人」の中に登場する神秘家マキシモスの言葉である。
それは「智識の樹と十字架の樹を基礎」にした来るべき理
想世界のことであり、田漢がしばしば用いる言葉でいえ
ば「靈肉一致の世界」のことである。つまり、田漢の理想
とする「少年中国」像とはこの「靈肉一致の世界」のこと
であるといえよう。

また、ここには田漢の中国の現状に対する認識の一端が
現われているといえるだろう。つまり、田漢には「個性の
完成」と「社会の改造」とを二つながらに解決しなければ
ならないものとして中国の現状は映っていたと思われる。
だが、それは田漢だけの認識ではなかったともいえるよ
う。やや一般化しすぎたい方になるが「五・四」期の青年知
識人、しかも中国の総人口からみれば圧倒的に少数者であ
った彼らがむしろそれ故に意識、無意識を問わず抱えてい
た課題とは、祖国中国の植民地状態からの解放であり、ま

たそれと不可分なものとしてあった中国の「近代化」であつたろう。「少年中国の創造」を最終目的とする少年中国学会とはまさしくこの課題に応えようとした青年知識人の集りであつたに違いない。あえていえば、ここには新人会と少年中国学会とのある違いが認められるように思われる。つまり、少年中国学会とは発起人七名の顔ぶれをみてもわかるように未だ思想的に未分化な状態の中で「少年中国の創造」というナショナルな課題を背負っていたのである。それに対し新人会は結成の背景に浪人会と吉野作造との立合演説会が考えられるように、結成の当初から本質的には国家主義などとは相容れぬ性格をもっていたといえよう。それは『デモクラシー』の「発刊の辞」で世界の文化的大勢からヒューマニズムの基本原理としてデモクラシーが説かれるのに対し、田漢が「惠特曼の百年祭」(『少年中国』一卷一期)の中でそれをアメリカ人の「民族性の結晶」と捉えていることでよりはっきりするように思われる。そして、こうした田漢にとって先の課題に應える恰好の手段ともいえるのが幼い頃から親しんでいた文学だったのである。

少年中国学会は一九二〇年から二年かけて会員の「終身志業調査」というアンケートを行なっている。田漢はその中の質問事項「一生研究したい学術」には「Art」と

「一生従事したい事業」には「Play Write, Poetry expression, Painting」と答えている。

アンケートでは「一生従事したい事業」に対して会員の大半が「教育」と回答しており、「文学」と回答したのは田漢と沈沢民の二人だけである。「教育」が重視されたのは少年中国学会の次のような発想に基づくものである。少年中国学会第一回理事王光祈は「少年中国学会之精神及其進行計画」の中で、同会にとって「少年中国の創造」が最終的な目的であり、そのコースを導くための理論すなわち「主義」は会員各人で追求されるべきもので会全体としての「主義」を採用するかは当面の必要事ではないという。それは、現状ではいかなる「主義」を採用してもそれは成功しないからであり、中国人の思想習慣の徹底的な改革というそのための土台作りが先決問題だったからである。だがいえば、そこで「教育」と「文学」が同列にならんでいることは、王光祈の問題の前で文学、さらには芸術一般、学術までもが当時、それに寄与するものであったことを示しているだろう。いいかえるならそれに應えることが文学のもつ使命であり、そこで占める文学の意味であったといえよう。

さて田漢のいう文学が「個性の完成」と「社会の改造」

とを二つながらに図る文学であったことはいうまでもない。それは竹内好氏のいう「民族のための文学と近代的な自我の確立の文学」とを同時に志向した「国民文学」的な性格をもっているといつて過言ではない。^(註三七)

しかしながら、それは先にのべた「五・四」期の青年知識人が抱えていた課題同様に、ある意味で二重性をもっているといえよう。つまり、「民族のための文学」と「近代的な自我の確立の文学」とが結びつき得るためにはまだ多くの中間項が必要なのである。しかし、田漢の場合、その二つがストリートに結びついていたところにより積極的な文学の意味が見いだされてきたと考えられる。そしてまたいえば、少年中国学会が「少年中国」創造のためのその土台造りを当面の課題としたように、田漢がまず着手しなければならなかったのは「社会の改造」に先立つ「個人の改造」であつただろう。田漢にとって「社会の改造」が究極の問題でありながら「個性の完成」をめざす、いかえなら個の問題をまずその念頭に置かなければならなかつたと思われる。

そうした田漢にとって自らの境遇も含めて最大の関心事であつたのが恋愛・結婚問題である。それは、イブセンの「人形の家」が当時、問題劇、社会劇といわれていたこと

からも解るように、個が社会と対立する一つの図式の反映であり、田漢にとっては後述するような「霊肉の衝突」の典型でもあつたのである。

時期的にはやや下るが、田漢は所謂「白蓮事件」の新聞記事を逐一日記に書きとめている。そして、白蓮が夫の闊や富、名声を毅然として捨てて、「愛と自覚の生活」を求めたがゆえに「人形の家」のノラになつたと同時に、「海の夫人」のエリーデにもなつたのだと記している。^(註三八)

あえていえば、「近代的な自我の確立」にはじまりそれと「民族のための文学」とをストリートに結びつけて考えていた田漢にとって、その文学とはおそらくこうした主体の自覚と奮闘とを捉しながらついには自ら理想とする「少年中国」を創造するものとして位置づけられていたに違いない。

(3)

既に述べたように、文学を通じて理想とする「少年中国」を創造しようとしていた田漢は、二五、六歳までに詩歌論、小説論を含む「少年中国の新文学建設論」をまとめる構想を持っていた。^(註三九) その一連の作業ともいえるのが「詩人と労働運動」(《少年中国》一卷八期・同九期)、「新羅曼主義及其他」(同二期)である。このことだけからもわかる

ように、田漢のいう「少年中国の新文学建設論」とは「新浪漫主義」のことである。今日まだ日本ではみることができないが、田漢が書いた最初の近代劇「Violin and Rose」(原題「歌女与琴師」)とは上海で梨花大鼓を唱っていた劉翠仙をモデルに、歌姫と楽士との恋愛を描いた「Democratic Art」を鼓吹した Neo-Romantic の戯曲^(註二〇)であるとい^(註二一)う。

「新浪漫主義」芸術とは日本に留学してきた田漢が最も強い感動と興奮とを覚えた芸術であった。田漢は一九二〇年の二月鄭伯奇と有楽座でメーテルリンクの「青い鳥」を見た。彼はその時の興奮をこの年の一月に文通を始めたばかりの郭沫若に次のように伝えている。

沫若！私は本当に幸せだ。Neo-Romantic Drama を「沈鐘」のほかにこの新劇のふるわぬ日本でさらに「青い鳥」をみたんだ。^(註二二)

だが、田漢が「新浪漫主義」を「少年中国の新文学建設論」と捉えていくのは自らがその芸術に強い感動を覚えたというだけにとどまらない。それは、「新浪漫主義」文学こそが「二十世紀の思潮に適合した少年中国」の文学に相応しいヨーロッパ最新の、最も「近代的」な文学と考えられたからである。

「新浪漫主義」文学は最新の文学という認定は田漢の場合、進化論とその進化的発展法則に基づいてヨーロッパの文芸思潮史を解明してみせた厨川白村の文学論の影響の下に導き出される^(註二三)。田漢の進化論の受容、それは「詩歌与労働運動」の中で高島素之の『社会主義と進化論』を引用しマルクスとゾラとの共通点を探ろうとしていることからわかるように進化論が一つの発展法則をもっていたその「科学性」ゆえにマルクス主義理解の当然の前提となっていた当時の時代的雰囲気と関わるものであろう。そして、こうした進化論の取り上げ方はまた田漢自身のある社会主義に対する関心をも示しているだろう。

田漢のロシア革命に対する反応は極めて早い。それは田漢の叔父、易梅園の影響である。田漢はロシア革命が起きるとまもなく易梅園の勧めに従って新聞記事から材料を集めて「俄国革命的経済原因」を書き、易梅園が関係していたと思われる神州学会の《神州学叢》に投稿した。これがきっかけとなって易梅園の友人である李大釗から激励の手紙を受けとるのである。^(註二四)

さて、前述した進化的発展法則に基づく文芸思潮史の理解とは、文芸思潮史に社会思想史、さらには階級闘争史までをオーバークラップさせて捉えるものである。いまその

図式を「詩人と労働運動」の中にみるならば、擬古主義と資本主義、浪漫主義と民主主義、自然主義と社会主義とをそれぞれ重ね合わせるという図式である。そしてこの図式に第一階級Ⅱ君主階級、第二階級Ⅲ貴族階級、第三階級Ⅳ中産階級という図式がオーバーラップされる。そして、この先に位置づけられるのが「新浪漫主義」なのである。田漢は「新浪漫主義及其他」の中で次のようにのべている。

旧浪漫主義の神秘というも、いたずらに忘我の境を謳歌するだけで、夢幻の空想に耽り、まったく現実の生活を遊離してしまっている。しかし新浪漫主義 Neo-Romanticism とはかつて一度自然主義によって現実の洗礼を受け、懐疑の苦悶をへて、科学的精神に陶冶された後に生まれた文学なのである。

このように田漢によれば「新浪漫主義」とは旧来の浪漫主義と自然主義の双方の性格を合わせもつ、つまりは現実的、科学的な側面をもつと同時に、理想的、神秘的な側面も持っているヨーロッパ最新の文学なのである。そして、この「新浪漫主義」の文学によって現出される世界が最も「近代的」な社会と捉えられていたであろう。「霊肉一致の世界」なのである。それは田漢自身が自ら求める世界を「Neo-Romanticの楽土」^(註三四)と呼んでゐることで明らかだろう。

「霊肉一致の世界」、それは「新浪漫主義」の合わせもつ二つの性格によって現出される世界であろう。田漢はそれが現実的、科学的であることによって現実社会の矛盾をつき、理想的、神秘的であることによって自覚から奮闘へと導かれることによって現出されると捉えていたに違いない。そして、田漢にとって彼の力点が前者より後者にあったこともいうまでもないだろう。

田漢は自ら感動した「Neo-Romantic Drama」^(註三五)「沈鐘」について、それが「芸術生活と現実生活の衝突の悲劇」、つまり「霊肉の衝突」を描きながら、そこに「悲しみや喜びを超越した一つの美の世界を形成した」といい、それが「Neo-Romanticismの本領」なのだ^(註三五)と郭沫若に伝えている。それは田漢の言葉でいえば「新浪漫主義」の「生活を芸術化 Artificate」する力であり、「人生を美化 Beautify」する力のことなのである。

だが、いえば、この「浪漫主義」によって喚起されるのはあくまで個人の自覚であり、個の奮闘の精神でしかない。そこにはそれが「社会の改造」へと向っていく必然性は必ずしも存在しないのである。だが、前述したように田漢はこの個の自覚と奮闘とをストレートに「社会の改造」へと結びつけて捉えていたのである。それは、変革主体の

エネルギーに期待を寄せながら、変革主体の確立こそが何よりの急務であると捉えていた田漢の思いの現れとも受けとれよう。だが、あえていえば、それは「芸術」のもつ価値や意味に大きく依存していた姿の現れとはいえないだろうか。

田漢のいう「芸術」とは所謂「芸術」の意味をはみでた言葉のように思われる。「芸術生活と現実生活の衝突」という時の「芸術」とは明らかに「理想」と置き換えることができるだろう。田漢また「人生を芸術化する」ともいう。この言葉自体はわかりにくいものではあるが、それが先の「理想化」に近い意味であることは確かだろう。そうして見た時、田漢の個の自覚、奮闘から「靈肉一致の世界」へとという発想は「人生の芸術化」から「社会の芸術化」へと置きかえて捉えることができ、それは「芸術」一般が内包するある普遍的な性格ゆえに多分に感覺的なかたちで「人生の芸術化」が「社会の芸術化」へと結びつきうると捉られていったように思われる。

さらにいえば、田漢が進化論という「科学的」な理論によって導きだした「新浪漫主義」とは、ヨーロッパ最新の、その意味で最も普遍性や世界性をもつ文学なのである。いうならば、田漢の「個の完成」と「社会の改造」とをスト

レートに結びつけた「新浪漫主義」の文学とは、それが普遍性、世界性をもつものとして捉えられることよって一層積極的な意味をもっていたと思われる。そしてそれはまた前述したように彼らに課せられていた二重の課題に応えうる文学理論でもあったといえよう。

さて、このように文学をそれ自体の価値に全面的な信頼をおいていたと考えられる田漢にとって、その文学が人々の自覚と奮闘を促しうるか否かは、文学そのものの問題ではなくむしろ作家主体の側の問題として捉えられる。田漢はそれを芸術家の「使命」として次のようにいう。

私たちが芸術家にならうとするなら、人生の暗黒面を暴露し、世間の一切の虚偽を排斥し、人生の基本に立たせると同時に、さらに人々をひきつけて芸術の世界に導き入れ生活を芸術化 Artificate しなければならぬ。すなわち人生を美化 Beautify して人々に現実生活の苦痛を忘れさせ陶酔と法悦とが渾然一体となった世界に引き入れてこそはじめてその力を充分に發揮しえたといえる。^(註三六)

ここにみえる芸術家としての自己認識、さらには、すべてを芸術家主体の問題として取り込んでいく発想は、第一節の中でのべた、変革主体としての青年の気概や使命感に

繋りうるものであろう。つまり、そうした意識や発想の中には常に最も新しいものへと突き進んでいく力学的な構造が存在している。いうならば、田漢の「少年中国の新文学建設論」が「新浪漫主義」というヨーロッパ最新の文学でなければならなかった理由がここにある。

またいえば、こうした変革主体としての自己意識や使命感は、それが常に最も新しいものを求めていく力学的構造を持っている以上その新しさがもつ普遍性、世界性の希求へと繋がっていくと同時に、前述した文学の価値や意味に対する全面的な信頼の姿とも絡り合いながら容易に自己がその新しさや普遍性、世界性と結びついているという実感を生んでいったに違いない。そして、それはコスモポリタンなものへの共感となって現れ、新人会と共鳴するそのベースになつていたように思われる。

田漢が新人会と接触したのが確認できるのは、鄭伯奇と「青い鳥」をみた一九二〇年二月が最も早い時期である。それまで文通でしか田漢を知らなかった鄭伯奇はこの時、田漢を訪ねて京都から上京する。そして東京滞在中に田漢から「李初梨兄弟」、「文学を愛好する友人たち」さらには「日本の進歩的な学生団体である新人会の二、三人のメンバー」を紹介されたと回想している。^(註三七)

田漢が新人会のメンバーを知ったのは李大釗の紹介によるものであろう。田漢が新人会のメンバーと接触していたのは「北京大学遊日学生団」の来日よりも早い。こうした田漢が同団が上京した際、それと何らか行動を共にしただろうことは想像に難くない。^(註三八) 田漢はまた一九二〇年一月発足したばかりの「コスモ倶楽部」第一回例会にも出席しているのである。^(註三九)

田漢の実質上の処女作「咖啡店之一夜」(《創造》季刊一卷一期)はちょうどこうした新人会との接触があった時期に書かれたものである。この作品が彼なりに「新浪漫主義」を志向した作品であることはいうまでもない。「咖啡店之一夜」はすでに記した「Violin and Rose」の反響に勇気づけられ書き上げられたものだという。これまでみてきた田漢の営みのしめくくりとして取り上げてみたい。

李初梨の経歴をモデルにしたというこの一幕劇とはあるカフェーを舞台に、白秋英と林沢奇という二人の青年の恋愛・結婚問題を軸にストーリーが展開していく。李初梨がモデルであろう高等学校の学生林沢奇は不本意な縁談を経済的な理由から承諾せざるを得ず、その苦悶を酒で忘れようとしている。カフェーで女給をしている白秋英も父親の死後旧式の結婚を強いられ一人家から逃げだしてきた

が、白にはいつか恋人李乾卿が迎えにくるという夢があった。だが、李がこの街に居ると知った矢先、白は偶然カフェーを訪ねてきた李によって彼が既に婚約していることを知らされる。こうして共に同じ寂寞と孤独を抱くことになった、林と白はこのとき社会という、人生という「大沙漠」を互いに支え合って生きていく、べく兄妹の誓いを結ぶ。そうした時、隣家の旅館から漂泊の中で「詩的生活」をおくるロシアの盲目詩人コロレンコのもの悲しい歌声がギター之音と共に聞えてくる。この時、林は思わず「ああ、芸術家の悲哀！人生の道行きの難しさ！」と口にする。……

「コロレンコ」とは漂泊の詩人エロシェンコがモデルであらう。エロシェンコは新人会の会友ともいえる存在で、「コスモ俱樂部」の一員でもある。そして、ここには同じ孤独と寂寞を抱く者同志が苦悶の中から目覚めて立ち上り互いに手を携えて社会の「大沙漠」を「詩的生活」を求めて、つまりは「靈肉一致の世界」を求めて生きていこうとする姿が描かれている。「詩的生活」をおくるとはコロレンコのように「漂泊」の孤独という大いなる代価を支払わねばならない。つまり、コロレンコの歌声は彼二人に対する連帯を表わすと共に、彼らがいま「詩的生活」への第一歩を歩み出したことを意味するのだから。個の覚醒から

「詩的生活」の希求、「漂泊」の詩人「コロレンコ」との共鳴、ここにはすでにのべてきた田漢の「新浪漫主義」の理解、その文学にこめた彼なりの意味が凝縮されているといっただろう。だがここには甘い感傷的なムードの中に「詩的生活」への共鳴が描かれ、リアルな現実の中で苦悩する人間像はもはや描かれていないのである。すべては「ああ、芸術家の悲哀！人生の道行きの難しさ！」という一句が象徴しているように思われる。

創造社、少年中国学会、新人会、それを三つのリングに喩えるなら、そのリングの端はそれぞれ相互に絡まり合っていたといえるだろう。そして、創造社の場合はそのいずれとも「新浪漫主義」によって絡り合っていたはいえないだろうか。

周知のように、新人会は一九二二年二月、会の三周年を機に純然たる学生団体としてその様相をかえ「マルクス主義への純化」をすすめていく。そして、この新人会と創造社とは既に述べたように変革主体としての自己意識、ロマンのな性格と関るコスモポリタニズムへの傾斜から田漢などにみたような個的な繋りをもっていたのである。その繋りはその後も個的なかたちではあっても継続してあったに違いない。そして、それは後に創造社が所謂「左傾化」を

とげる中で福本イズムを受けとめていく一つの背景となつていると考えられる。

また、新入会が「マルクス主義への純化」を図っていたころ、少年中国学会はすでに一九二一年七月の南京大会をへて、会の根幹に関する「主義の採用」をめぐってそこに思想的な対立が顕在化していた。既述したように、創造社は少年中国学会と密接な関わりをもち、しかもそこに等質の問題や課題をも背負っていたと考えられる。こうした創造社にとって、少年中国学会の「分化」の過程で生じた問題、つまり「国家主義」者と《中国青年》の論争などは、そのまま創造社にはね返る、また創造社自体が「左傾化」をはたす中で不可避的に直面せざるを得ない問題でもあったといえよう。

注一 郭沫若「編輯余談」《創造》季刊二卷二期へ一九二四年二月

注二 「創造社年表」(伊藤虎丸編『創造社研究』所収 アジア出版 一九七九年十月)

注三 新入会については左記の諸論文・研究を参考にさせていた。

- ・判沢弘・佐賀惣悦「前期新入会員」(思想の科学研究会編『共同研究 転向(2)』所収 平凡社 昭和三四年)
- ・鶴見俊輔「後期新入会員」(『共同研究転向(中)』所収)

・佐々木敏二「新入会(前期)」の活動と思想」(『キリスト教社会問題研究』一三号 一九六八年三月)

・石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新入会の記録』(『経済往来社 一九七六年』)

・H・スミス『新入会の研究』(東京大学出版会 一九七九年)

注四 《デモクラシー》創刊号(一九二〇年三月)

注五 「少年中国学会規約」(張允侯等編『五四時期的社団』所収 香港三聯書店 一九七九)なおこの宗旨は七月一月の成立大会で発起人の提議により、より簡潔な表現を求めて改訂されたものである。改訂前の宗旨は「少年精神を發揮し、眞の學術を研究し、社会事業を發展させ、末世の風氣を轉移する」である。

注六 觀風子「発刊の辞」(『デモクラシー』創刊号)

注七 「一九一九年一月二三日上海會員在吳淞同濟學校開會紀略」(『五・四時期的社団』所収)

注八 王光祈「本会発起之旨趣及其經過情形」(『五・四時期的社団』所収)

注九 松尾尊兌「民本主義者と五・四運動」(『大正デモクラシーの研究』所収 青木書店一九五六)

注一〇 拙稿「創造社年表」補注(『創造社研究』所収)

注一一 以下特別の断りがない限り、交流の経過は左記の二篇に依った。

- ・吉野作造「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」(松尾尊兌編『中国・朝鮮論』東洋文庫一六一所収 平凡社 昭和五一年)

・同右「日支國民的親善確立の曙光」(同右)

注一二 岡上守道が北京に発つたのは新人会機関誌の記載によれば七月六日のことである

注一三 原載は『五四時期期刊介紹』(中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林編訳局研究室編著 人民出版社一九五九年)によれば七月五日発行の上海時事新報副刊の《学燈》紙上、原文は『五四愛國運動(下)』(中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯組編 中国社会科学出版社 一九七九年三月)の四二頁

注一四 宮崎竜介は一九一九年末から初めにかけて中国に行き他の一名と共に上海の学生連合会で演説し、日本駐在官憲の忌諱にふれた。また平貞蔵も中国に行き帰国してから「北京大学の学生達と会いました。日貨排斥など一口も出さずに解放運動について話し合へるのは愉快です。新人会のこととはみな非常によく了解しています」(《先駆》一九二〇年三月号)と記している。このほか一九一九年八月一〇日には佐野学が、同年中には和田元が中国を訪ねている。

注一五 易君左「日本学生界の黎明運動」(《少年世界》一卷一期 一九二〇年一月)

注一六 「会員消息」(《少年中国》一卷一期)

注一七 「新人会記事」(《先駆》一九二〇年六月号)

注一八 田漢「白梅之園の内外」(《田漢散文集》所収 上海今代書店 一九三六年七月)

注一九 田漢「創作經驗談」(《田漢散文集》所収)

注二〇 拙稿「創造社年表」補注②(《創造社研究》所収)なお

曾琦の日記によれば、張夢九と曾琦が日本を発つたのが六月八日、北京着が同月二五日、少年中国学会の準備会が開かれたのは僅かその五日後のことである

注二一 田漢「離郷的滋味」(筱梅編『田漢創作選』所収 上海仿古書店 一九三六年十月)

注二二 「少年中国学会會員名單」(『五四時期的社団』所収)

注二三 郭正昭・林瑞明「王光祈の一生と少年中国学会」(台湾環宇出版社一九七四年五月)また王独清は上海で『救国日報』の仕事をしていたころ少年中国学会會員と知り合い、一九二〇年春、ヨーロッパに留学した際、同会會員が主宰する「パリ通信社」の仕事につく手筈になっていた(王独清『我在欧州的生 活』)

注二四 「会務紀聞」(《少年中国》一卷二期 一九一九年七月)

注二五 「少年中国学会會員終身志業調査表」(『五四時期的社団』所収)

注二六 王光祈「少年中国学会之精神及其進行計畫」(《少年中国》一卷六期 一九一九年二月)

注二七 竹内好「国民文学の問題点」(《国民文学論》所収 東京大学出版会 一九五四年一月)

注二八 田漢「日記」一九二一年十月二二日(戴叔清編『中国名家日記』所収 香港新文学研究社 一九七七年五月)

注二九 田漢「詩人と労働運動」(《少年中国》一卷八期)

注三〇 田漢、郭沫若宛書簡(一九二〇年二月二九日)(『三葉集』所収 上海亞東図書館 一九二〇年五月)

注三一 「注三〇」に同じ

注三二 田漢と厨川白村との関わりについて、くわしくは省略したが本文に引用した「新浪漫主義及其他」の一節は厨川白村の『近代文学十講』（大日本図書株式会社版）第九講の「一、新浪漫派」の一節（四五七頁）と明らかに符合する。

「唯だ夫れ神秘夢幻の文学であると云つてもそれは決して前世紀初めの浪漫派のやうにひたすら夢幻の空想の境にさまよふ理想憧憬時代の文学ではない。それは既になかごろ一たび現実の苦い経験を経て来て、科学的精神に陶冶せられた後の文学であるからだ。自然主義懷疑思潮といふ痛烈な人生の経験試練を経て後に現はれた文学である」

注三三 田漢「我所認識の十月革命」(『戯劇報』二二一九五七年)

注三四 田漢「梅雨」(『少年中国』一卷二期一九一九年八月)

注三五 「注三〇」に同じ

注三六 「注三〇」に同じ

注三七 鄭伯奇「憶創造社」(『文芸月報』一九五九年第五期)

注三八 田漢の日記(一九二一年十月二二日)によれば、田漢は「北京大学遊日学生団」が東京での行事を終えて京都に発つのを東京駅で見送っている。

注三九 「注二八」に同じ なお「コスモ倶楽部」のコスモとはコスモポリタンの略称 一九二〇年一月に発足し会員は堺利彦、山川均、高津正道、大杉栄、岩佐作太郎、吉野作造、長谷川如是閑などのほか新人会、曉民会会員を含めた計七六名。田漢が出席した最初の例会とは一月一日、一橋の帝国学士会

で開かれ、その日は「堺以下(大山郁夫、石川三四郎)七名ノ特別要視察人及曉民会、新人会員(朝鮮人、支那人十一名)計廿七名出席」(『社会文庫編』『大正思想団体視察人報告』)したという。同倶楽部の性格などについては松尾尊允氏の「吉野作造と在日朝鮮人学生」(原弘二郎先生古稀記念会編『東西文化史論叢』所収 関西大学出版部一九七三年)の中に詳しい紹介がある

注四〇 「注一九」に同じ。